
呪われた愛の屋敷で

フィルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた愛の屋敷で

【Nコード】

N0567P

【作者名】

フィルム

【あらすじ】

俺はある屋敷の執事になった

拾われたあの日に見た寂しがり屋な王の瞳を見た時から決めたこの少女達を守る為に、俺は悪魔でも鬼にでもなり守ると決めた例えそこが呪われた屋敷と恐れられていても

そこに住むほとんどが人外の者でも

異常なほどの狂愛でも

俺は守り愛すると

出会い

12月某所

雪が降り積もる街中

薄い茶髪が雪をかぶりその瞳のしたには隈ができており瞳は虚ろになりかけていた少年がフラフラ歩いていた

服装はジーンズにダウンジャケット、マフラーを巻いている

少年「はぁ……………寒いぜっ」

少年は足をとられ盛大に転けた

雪が積もっていたので怪我はないが顔に雪がかぶり鼻を噉っていた

2

少年「あーヤバいなあ……………ミイとキイ寒くないかな？

……………美耶は大丈夫かなあ……………くそっ！こんなことなら和や禎の家で泊まらせてもらえば……………ってそこまであつかましくできるか！」

少年は飼っていた猫二匹と離れ離れになった妹の心配をする

丁度1週間前

母が死に、父親が多額の借金を残し蒸発

危機を感じた少年『平菊 誠』は猫を親戚に渡し、妹の美耶は母の姉に保護してもらった

そして誠は少しの着替えとある程度の日用品と5000円が入った財布と残しておいたお年玉30000円を持ち家を出た

他の荷物は捨てるなり親友達に預かってもらった

当初は友達の家を転々と泊まらせてもらったりしていたが、迷惑をかけられないので金を少し置いて出た

しばらく野宿やら宿に止まっていたが金が尽きかけたので路闘で稼いでいたがそれも尽き、2日間寝ないでさまよい歩いていた

誠「死ぬのかなあ……………こんな所で
あんな糞野郎のせいで……………ん？」

誠の視界に立派と呼べるぐらいの屋敷が入った
しかし見たことがなかったので幻覚か何かと思っていた

誠「まあ…人間見たことからしか学べないからな……………どうせ死ぬなら幻想でも抱いて死んだ方がマシだ」

誠は動かぬ体に鞭を打ち左足を引きずりながら歩いた
所詮幻覚であると思う屋敷に向かい
ただひたすら、がむしゃらに

誠「広い……………と言うよりデカいな」

誠はドサツと腰を下ろした
壁まで這いずり壁にもたれた
朦朧とした意識をまだ保ちながらゼーゼーと息をきらしながら

誠「くっ……もう限界なのかな？
もう少しもってくれてもバツは当たらないぜ」

誠は震える手でポケットに入っているケータイを取り出し開いた
待ち受けには元気だった頃の母と妹の美耶、膝の上で眠っている猫
が2匹が写っていた
ディスプレイに誠の涙がポタポタと落ちる

誠「情けなさすぎ……だな
こんな姿、天国にいる……母さんと美耶に……見せ……れるかつ」

誠は力なく倒れた

？「この結界の中に私以外の生身の人間……お嬢様に報告をせねばなら
りませんね」

青色の髪を靡かせたメイド服をきた女性が誠を抱きかかえて屋敷の
中に入った
誠 side

どこだ……ここ？
天国なら嬉しいが
こんなふんわりして暖かい場所なんて……
まず母さんに謝らないといけないかな？

誠「む……天国とは随分豪華な場所なんだな」

徐々に回復していく意識の中はつきりとそれは言えた

？「ここは天国じゃない……私達の家」

誠「にやいやぁ!？」

ななななななっ!!何だぁ!？

あ……よく見たら俺の身体の上に小さい少女とその肩に小さい妖精が乗っていた

いやいやいや、待ちましようよ、何このギャルゲ？

誠「…………え…」と

セラ「セラ…………この子リリィ」

ああこの子の名前がセラで妖精っぽいのがリリィか
しかしいつまで上に座るつもりなんだろ？
いやいいんだけどさ

？「あら、その人間起きたの？」

ワオ！！人間？ええ人間ですけど何か？

セラ「はい……お姉様」

誠「姉？……へえ」

随分小さく見える気が……まあいいか

ソラン「失礼ね……まあいいわ、私はソラン、吸血鬼の王よ」

俺は出会った

とても真っ赤な……血のような色の瞳をもつ吸血鬼の少女に

契約（前書き）

感想、アドバイス待ってます

契約

誠「……………」

誠は見た目通りポカーンとしている
そしてこう思っていた
何故こうなった……………」と

ソラン「どう？わかった」

理解したけど理解したくない
どこで道を間違えた
そんな事を思い誠は現実逃避していた
しかしソランはそれを許さず

ソラン「聞いてないなら吸い殺すよ」

誠「ああ、理解したぜ
けど少しくらい逃避させてくれ」

あえなく逃避失敗の誠はどうするか考えた

誠（ここは妖怪とかが暮らす屋敷

普段は人に見えないように結界を張り

まれに結界の効果が弱くなり、肝試し気分が入った輩を政府に突き出し、記憶を消してから帰す

それゆえに呪われた屋敷ね…………だめだ、笑えねえぜ）

何故かソランは顔を赤らめ突然誠を抱きついた

誠「オイオイ、どうした、急に抱きついて」

ソラン「もう少し……………こうしてていいかしら？」

誠「かまわないぜ……………ッ!？」

誠は突然頭を抑えもがき苦しみ始めた

ソランは誠の呻き声が聞こえているが、それを無視して抱きついたまま、

いや、もっと強く抱きつく

誠（何だ！？この…………ビジョンは……………頭がつー!!痛い）

？『ねえ……………君はどうしてないてるの?..』

？『私は……王様だから、誰も遊んでくれないの』

？『じゃあ遊ぼうよ、僕が友達になったら遊べるでしょ？』

？『……うん、私はーラー』

？『僕はねーー』

誠「はっ！………ソラン？」

誠は自分の胸あたりが濡れているのがわかった
話しかけようとしたが悟って話しかけず、片腕で抱きしめ、もう片
方の腕で頭を撫でた

誠「ソラン………大丈夫か？」

ソラン「ええ………落ち着いたわ
思いだしてくれた？」

誠「少しだけ………でもわかっているのは昔の俺とソランは友達って
ことだけだぜ
でも違和感の方が大きくてな………まるで俺が別人みたいに思えたぜ」

あれから数十分、落ち着いたソランは誠から離れて椅子に座り誠はベッドに腰をかけていた

ソラン「そう………お願いがあるの、聞いてくれる?」

誠「ああ」

ソランは少し俯きボソツと呟いた

ソラン「私と………契約して」

誠「契約?」

誠はもう一度聞き直した

そもそも契約は何だ?と聞こうとしたが、なんとなくわかったので聞かなかった

ソラン「私があなたの血を吸うことによってあなたと契約する
そしたら、ここに住むのよ執事として……友達として…兄として」

誠「んじゃ頼むわ

もう幾宛もねえし、ソランが心配だからな

どうせあのままなら死んでた命、ここで使っさ」

ソランは涙ぐみ誠に近づく、一步一步、確かな足取りで、触れれる近さまで来たらソランは誠の上着のボタンを一つ一つ外し愛おしく誠の身体を胸から鎖骨、鎖骨から首をなぞり頬を両手で包むそしてソランは誠の首に噛みついた

誠「っーーーーー!!!!!!」

ソラン「んぐっ……………ぐっ……………んッ!」

誠は激痛に耐えソランは美味しそうに誠の血を吸う
飲みきれないのか血が上着にポタポタと落ちる
そしてソランは満足そうに口を話し首に付いた血を舐めとる

ソラン「どう? / / / どこか熱い?」

誠「右目が酷く疼くぜ……………契約は成功したのか?」

ソラン「ええ……………明日から実習の為に練習とかあるから、仮の執事服を置いておくからそれを着てね……………朝ご飯は好きに食べてて」

誠「わーっ たぜ、おやすみ、ソラン」

ソラン「おやすみ、誠」

ソランは部屋を出て誠はベッドに横になる
首を抑えて考える

あの記憶に出てきた自分はなんなのか
すぐにまあいいか……と結論づけた

2日ぶりの布団はこんなフカフカのベッドか……と思いながら
疲れていたのですぐ眠りについた

更新停止のお知らせ

この小説は別サイトに移します
読んで下さった皆様ありがとうございました。

できれば他の作品を見てください

残りは文字稼ぎです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0567p/>

呪われた愛の屋敷で

2010年11月28日16時41分発行